

## 社説

&lt;2020.9.21&gt;

## コロナ下の大学

## 対策徹底し対面授業に

新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、ほとんどの大学でオンラインによる遠隔中心の授業が続いた。対面授業を始めた大学も、まだ手探りの状態といえる。小中学校や高校で登校が再開されているのに大学ではなぜと、不満を抱く学生は多いだろう。

特にキャンパスライフを楽しむにしていた新入学生は気の毒でならない。授業は遠隔で受けられても、大学への入場が制限されれば仲間づくりも思うようにできない。今後の感染状況や大学の規模、所在地などにもよるが、対策を徹底して可能な限り対面授業を増やし、学生がキャンパスに足を運べる機会をつくってほしい。

文部科学省が全国の大学、短大などを対象にした調査で、後期授業を全面

的に対面で実施するのは2割に満たない。感染収束が見通せない中、静岡県内の大学も遠隔授業と対面授業をどのように併用していくか模索している。

静岡大は6月上旬に感染リスクが低い教室の授業など全体の約2割で対面授業を始めた。後期は、教室の収容定員の割合拡大など対面授業実施の条件を緩和する。県立大も後期から、薬学部、看護学部などの実験、実習を中心に2割ほどで対面授業を行う。特に1年生に配慮する姿勢を示す。

遠隔授業が基本だった静岡文化芸術大は、後期から感染対策を取った上で、対面授業の割合を85%までに増やす。受講者が多い授業も講義を2回に分けるなど、できる限り対面に移行する。

大学で小中高校のように教職員が感染対策の徹底を指導するのは難しい。登校を制限すれば、クラスター(感染

者集団)のリスクは抑えられるだろう。だが、学生は大学に満足に通えなくても、授業料を支払わなければならない。下宿生にとっては家賃の負担も大きい。それを補うアルバイトも感染禍で限られている。困窮する学生のため現金給付の制度も設けられたが、不満が高まるのは当然だ。

クラスターが発生した大学には誹謗中傷が寄せられ、学生がアルバイトを拒否されるなど差別的な扱いを受けている。こうした社会の空気も変えなければならぬ。

コロナ禍は、研究などにも支障を来す。宇宙と地上をケーブルで結ぶ「宇宙エレベーター」の実現に向けて超小型人工衛星の開発を続ける静岡大工学部でも、学生や教授が集まりにくく、研究が大幅に遅れている。

感染対策は科学的分析が進み、イベント入場者数の制限も徐々に緩和されている。大学も知恵を絞れば、対面授業を増やすことができるはずだ。